日蓮大聖人御書全集

常忍抄（じょうにんしょう）

新版
1334
〜
1337

常忍抄

弘安元年('78)10月1日　57歳　富木常忍

御文ほぼ拝見仕り候い了わんぬ。

御状に云わく、常忍云わく「記の九に云わく『権を稟けて界を出ずるを、名づけて虚出と為す』と」云々。了性房云わく「全くもってその釈無し」云々。

記の九〈寿量品の処〉に云わく「無有虚出より昔虚為実故に至るまでは、為の字は去声なり。権を稟けて界を出ずるを、名づけて虚出と為す。三乗は皆三界を出でざるこ

となし。人天は三途を出でんがためならざることなし。ならびに名づけて虚と為す」云々。文句の九に云わく「虚出にしてしかも実に入らざる者有ることなし。故に知んぬ、昔の虚は実の為〈去声〉の故なり」云々。寿量品の経に云わく「諸の善男子よ。如来は諸の衆生の小法を楽える徳薄・垢重の者を見て乃至諸の衆生は、もって乃至いまだかつてしばらくも廃せず」云々。この経の文を承けて、天台・妙楽は釈せしなり。

この経文は、初成道の華厳の別円より乃至法華経の

迹門十四品を、あるいは「小法」と云い、あるいは「徳薄・垢重」、あるいは「虚出」等と説ける経文なり。もししからば、華厳経の華厳宗、深密経の法相宗、般若経の三論宗、大日経の真言宗、観経の浄土宗、楞伽経の禅宗等の諸経の諸宗は、依経のごとくその経を読誦すとも、三界を出でず、三途を出でざる者なり。いかにいわんや、あるいは彼を実と称し、あるいは勝る等云々。この人々、天に向かって唾を吐き、地を蹶んで忿りをなす者か。

この法門において、如来の滅後、月氏一千五百余年、

付法蔵の二十四人、竜樹・天親等、知っていまだこれを顕さず。漢土一千余年の余人も、いまだこれを知らず。ただ天台・妙楽等のみ、ほぼこれを演ぶ。しかりといえども、いまだその実義を顕さざるか。伝教大師、もってかくのごとし。今、日蓮、ほぼこれを勘うるに、法華経のこの文を、重ねて涅槃経に演べて云わく「もし三法において異の想を修せば、当に知るべし、この輩は、清浄の三帰に則ち依処無く、あらゆる禁戒をば皆具足せず、終に声聞・縁覚・菩提の果を証することを能わず」等云々。この経文は正し

く法華経の寿量品を顕説せるなり。寿量品は木に譬え、爾前・迹門をば影に譬うるの文なり。経文にまた、これ有り。五時八教・当分跨節・大小の益は影のごとし、本門の法門は木のごとし云々。また、寿量品已前の在世の益は闇中の木の影なり、過去に寿量品を聞きし者のことなり等云々。

また、「不信は謗法にあらず」と申すこと、また云わく「不信の者、地獄に堕ちず」云々。

五の巻に云わく「疑いを生じて信ぜずんば、則ち当に悪道に堕つべし」云々。

総じて御心え候え。法華経と爾前と引き向かえて勝劣・浅深を判ずるに、当分跨節のことに三様有り。日蓮が法門は第三の法門なり。世間にほぼ夢のごとく一・二をば申せども、第三をば申さず候。第三の法門は、天台・妙楽・伝教も、ほぼこれを示せども、いまだ事了えず。詮ずるところ、末法の今に譲り与えしなり。五の五百歳はこれなり。

ただし、この法門の御論談は余は承らず候。彼は広学多聞の者なり。「はばかり、はばかり。みた、みた」と候

いしかば、この方のまけなんども申しつけられなば、いかんがし候べき。ただし、彼の法師等が、彼の釈を知り候わぬはさておき候いぬ、「六十巻になし」なんど申すは、天の責めなり。謗法の科の法華経の御使いに値って顕れ候なり。

また、この沙汰のことも、定めてゆえありて出来せり。賀島かじまの大田次郎兵衛・大進房、また、本院主もいかにと聞や申すぞ、よくよくきかせ給い候え。

これらは経文に子細あることなり。法華経の行者をば、

第六天の魔王の必ず障うべきにて候。十境の中の魔境これなり。魔の習いは、善を障えて悪を造らしむるをば悦ぶことに候。強いて悪を造らざる者をば、力及ばずして善を造らしむ。また、二乗の行をなすものをば、あながちに怨をなして善をすすむるなり。また、菩薩の行をなすものをば、遮って二乗の行をすすむ。最後に純円の行を一向になす者をば、兼別等に堕とすなり。止観の八等を御覧らんあるべし。

また、彼が云わく「止観の行者は持戒」等云々。

文句の九には初・二・三の行者の持戒をばこれをせいす。制

経文、また分明なり。止観に相違のことは妙楽の問答これ有り。記の九を見るべし。初随喜に二つ有り。利根の行者は持戒を兼ねたり。鈍根は持戒これを誓止す。また、正像末の不同もあり。摂受・折伏の異なりあり。伝教大師の市の虎のこと、思い合わすべし。

これより後は、下総にては御法門候べからず。了性・思念をつめつる上は、他の人と御論候わばかえりてあさくなりなん。彼の了性と思念とは、年来、日蓮をそしると

承

うけたまわる。彼ら程の蚊虻の者が、日蓮程の師子王を聞かず見ずして、うわのそらにそしる程のおこじんなり。天台法華宗の者ならば、我は南無妙法蓮華経と唱えて念仏なんど申す者をば「あれは、さること」なんど申すだにもきかいなるべきに、その義なき上、たまたま申す人をそしるじょう、あらふしぎ、あらふしぎ。

上空痴人

奇怪条

不思議

前々書遣

大進房がこと、さきざきかきつかわして候ように、つよづよとかき上げ、申させ給い候え。大進房には十羅刹のつかせ給いて、引きかえしせさせ給うとおぼえ候ぞ。

強々書

付返

また、魔王(まおう)の使者(ししゃ)なんどがつきて候(そうら)いけるが、はなれて候(そうろう)とおぼえ候(そうろう)ぞ。「悪鬼入其身(あっきにゅうごしん)」は、よもそら事(ごと)にては候(そうら)わじ。

事々重(ことごとおも)く候(そうら)えども、この使(つか)いいそぎ候(そうら)えば、よるかき(夜書)て候(そうろう)ぞ。恐々謹言(きょうきょうきんげん)。

十月一日(じゅうがつついたち)

日蓮(にちれん)　花押(かおう)